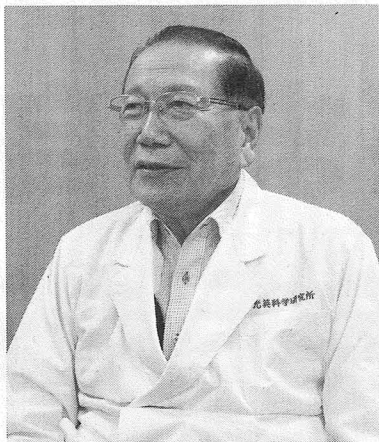


一般食への提案強める光英科学研究所

2020年 事業展望 村田公英社長に聞く

乳酸菌生産物質の主要原材料メーカーとしておよそ半世紀にわたり独自素材「Sixteens」などを供給してきた光英科学研究所。昨年は、原材料と製品GMPの認証を取得したほか、最終商品開発・販売の専門事業部を立ち上げるなど、製造・販売体制を新たにしました。2020年における意気込みを同社の村田公英社長に聞きました。

Interview



「昨年7月に原材料と製品GMPの認証を取得しました。この原材料について、今後どのように展開しますか。まずは、食品メーカーへの提案に注力していく。展示会での原材料「FF16」

と「Sixteens」に対する関心は、既に素材を知っている健康食品メーカーより食品メーカーの方が大きく、ブースに来場したほぼ全ての企業が興味を示してくれた。認知度が課題だったが、それがかえって乳酸菌生産物質に対する興味を掻き立て、「新しい素材として使ってみよう」と思わせようだ。当社の「FF16」と「Sixteens」は、これまでの研究で整腸など多様な機能を持つ可能性が確認されている。一度、複合素材として使用してもらえば、こうした機能が期待でき、機能によるリピートも期待できると思う。食品分野にも素材の有用性を認めてもらい、

機能を持った複合素材として定着させたい。——食品メーカーが配合する際に気を付けることはありますか。1点だけあり、それは乳酸菌生産物質の原材料コスト。一般食品の原材料のコストよりも高く、より確実に機能を期待して配合した場合、1日摂取目安量あたり「FF16」と「Sixteens」のコストは10円を少し超えてしまう。展示会のブース来場者にも伝えたい、「使ってみよう」と言ってくれる人が多かった。それだけに、食品分野には進出しなければならぬ。ただ、食品に配合するとすると、供給量は健康食品とはケタが違つた。食品に合わせた製造体制を構築することが必要だ。このため食品分野への進出は、クライアントの商品販売計画と、当社生産体制を考慮して慎重に進めているところ。ただ、今年はスーパーで「乳酸菌生産物質入

り」が多く見られるかもしれない。——自社最終商品は今年どのように展開しますか。化粧品の販売に力を入れていく。研究では「Sixteens」で、塗布による機能性を検証しているところ。商品は乳液などの基礎化粧品を発売する予定だ。——昨年からホームページで「ラクトバイオーム」という言葉を記載し始めましたが、この言葉の意味は。乳酸菌生産物質事業の総称を表す造語で私が作ったもの。菌の研究、ゲノム解析等の開発を含めた事業の基本理念推進のための呼称でもある。乳酸菌生産物質では字数が多く、イメージも硬い。このため、乳酸菌から「ラクト」を取り、腸内フローラを示すマイクロバイオームから「バイオーム」を取って合わせた。今年からは「ラクトバイオーム」の呼称で広く周知し、認知度を上げていきたい。